諸橋教授御講書始御進講紀念祝賀會記錄

新春御恒例の宮中御講書始の御儀は、一月二十二日午前十時より宮中鳳凰の間で取行はせられた。

この日、御進講の光榮を擔はれたる本會々長諸橋教授は他の奉仕の諸員と共に、天皇皇后御陛下の御前に參進、

漢書　論語憲問篇子路問君子章

の次第にて約三十分に亘つて奉仕せられた。

此處に、內野、森本、葉坂教授、小林助教授發起の下に、日を同月二十九日に卜して、午後六時より、御進講紀念祝賀會を若溪會館に開催し、森岡文理大學長以下、會する者交友子弟百を數へて、盛會を極めた。

次に同會の次第を記錄することゝした。

〔內野台嶺氏挨拶〕

發起人を代表して一言御挨拶申上げます。この度諸橋博士には、新年御講書始に當り、漢書の御進講を遊ばされました。この事は、啻に諸橋博士御一人御一家の光榮であるばかりでなく、同じく漢學に携はる我々仲間に取つて、之に上越す喜びはないのであります。その上、更に又考へますと、本學園から、このやうに御進講の大命を拜せられたお方は、全く前例がなかつたと言ひ得ないかも知れませんが、併し極めて稀なことで、その點本學園にとりましても、又光榮至極に存ずる次第であります。

申上げるまでもなく、諸橋博士が深遠なる學殖を藏せられ、崇高なる人格の所有者であられることは、天下周知の事

實でありまして、それについては、今此處で喋々するまでもありません。かゝる深遠なる學殖と、崇高なる人格とが、實に今日此の事あらしめたのであります。言ふ迄もなく、博士には、上に聖明なる天子樣を戴く昭代に生れ、光輝ある本學園の樞要な位置に在り、常に孜々として教育事業に從事されて居ります。敢て王者に非ずして、中庸の所謂三重、即ち時と位と德との三つを一身に合せ有して居られるのであります。誠に欽羨の至りに堪へません。

そこで、我々は、博士のこの度の光榮をお祝ひ致さうとして、取敢へず漢文學關係の者丈が打寄つて相談しました。それにつきましては、なるべく方面を廣くせよといふ他からの忠告もありましたが、會を致す方から考へると、色々違つた事情があつて、既に催されてしまつた方面もあり、又こちらから別に催さうとしてゐられる向もあり、旁々思ふやうにもならず、不取敢本學園の漢文學會を中心として、之に兄弟分たる國語國文學會の參加、及び諸橋博士に特別關係ある方々のお集りを願ひ、かゝる會合を致すことに立至りました。後になつて、それなら俺も出たかつたと申される方々も無いとは限りませんが、その邊のことは、どうか吾々の至らぬ所と御容赦を願ひます。

それから宴會のことでありますが、誠にお粗末千萬で申譯ありませぬ。もつと御走馳をと考へないわけでもありませんでしたが、學生諸君が是非參加願ひたいといふ、切なる希望もあり、甚だ失禮ですがその邊のことも考に入れまして、このやうに御粗末な御馳走になりました。折角多數の方々がお見え下さいましたのに、粗酒粗肴で、恐れ入りますが、右のやうな事情でございますから、何卒御諒察を願ひます。

それで今晩は、極めてお親しい方々の中の、又特にお親しい方々に限定されてゐますやうな譯ですから、どうぞ皆樣方から、諸橋博士に對する御祝辭を十分に承り、又諸橋博士からも、とつくりと御進講の御模樣など承りたいと存じます。簡單ながら、これを以て御挨拶に代へます。——(拍手)——

〔森岡學長〕(拍手)

私は諸橋博士に對しお祝ひを致したいと思ひます。宮中にては、年の始の重大なる儀式として、この御講書始は、明治

二年から芽出度い恒例となつて居り、之には天下の學者中、國書、漢書、洋書中の、最も聲望を負ひ、人格の高邁な方を召して御進講させられるのであります。故にこの大命を拜することは、學者としての無上の光榮であり、さう望んで出來ることではありません。然るに、我學園の諸橋博士が此の光榮を擔ひました。既に昨年は控としての大命を受けられましたが、今年は正進講者として御進講なされた譯であります。かく大命を拜受するは、學者無上の光榮で、博士にとつて非常な名譽であり、又御家門の譽であります。それのみならず、かゝる大學者を教授に持ち、かゝる人格者を友人として持つことは、我々學園の非常なる誇であります。この意味で今日のことにつき心からお祝ひ致します。（拍手）

御講書始めに陪聽を許されることは、昨年から始まりました。私は昨年一月十四日に陪聽を許されましたが、極めておごそかな、神々しい講席に臨んで、感激を覺えました。その時諸橋博士は控でありましたが、正進講者は幣原博士、羽田博士、それから穗積博士の三人でありました。その時の自分の感じを申しますと、御進講者は至尊に咫尺し奉り、日頃の蘊蓄を傾けるので、その感激は傍にゐる我々にも非常なものでありました。それについて私は次のやうな句を物しました。

進講の聲のみ冴えて御所の春

確に萬場水を打つたやうな靜けさの中に、唯御進者の聲のみ響くのであります。陛下におかせられては、絶えず御熱心にお聞き遊ばされ、時折うなづかせ給ふこともあります。

折々はうなづかせ給ふ初講書

句としてはまづいが、唯此のやうな實感であつたのであります。

今回諸橋博士の御進講に當つても、その通りだつたと博士は書れてゐる。兎に角、博士の如き大學者を我學園出身者から出し、この光榮を擔つたといふことは、諸橋博士を以て嗚矢となすのであり、今後このやうな大學者の續々と出られんことを祈る次第であります。御一身、御一家のみならず、大塚學園、更に若溪會の誇として、深くお祝ひ申上げま

す。――（拍手）――

初講書御所の自動車門にあり
儒書捧げ御講書初の御門入る
奈の峽水淸きところ名儒出づ
穴出づる龍蛇や天に雲を呼ぶ

〔中山久四郎博士〕

諸橋博士のこの度の御名譽に對しては、森岡先生より情意兼ね盡したお言葉があり、正式の儀禮的の言葉は之で盡したと言つてよろしい。又幹事のお方からも、學長の後は少し碎いて話してよい、寧ろさうするやうにといふ御注意もありましたので、さういふ心持をもつて申上げますから、從つて余りに親しみに過ぎて失禮に亘ることもありませうが、御許を願ひます。

さて諸橋博士は、約三十年來の同僚にして親友たるのみならず、同じく廣い意味の東洋學に從事し、その緣故深いものであります。而して、この度大命を立派に果されましたことは、平素の修養の致せる所でありまして、今更博士の日常の御修養に深く敬意を表します。實は同博士の爲に去る廿五日別方面で祝賀を致しました。その日は菅公の初天神の日で、それを選びましたことは、當日の世話人の用意のよさを後で話し合ひましたが、今日は御進講日の廿日から、一週間目の同じ金曜日で、これについては內野さん始め皆さんの深い御用意もあるかと想像致します。

さて私個人で申しますれば、信州と越後、信山高く越水長く、極めて深い因緣と思ひます。その博士がこの度の御名譽につきましては、人一倍お喜び申します。尙博士の從弟たる社會學の大家建部遯吾博士は、私共學生時代から色々啓發を受けてゐますが、その人を思ひ、諸橋博士を思ひ、二重三重にお祝ひ申上げます。聞くと諸橋家は越後の舊家にして、五十ケ村の大庄屋、然も鄕先生として昔の讀み書きそろばんの方面の鄕先生として、塾を開いて居られた。

私は博士の此の御先祖のことを考へて、一層深くお喜び申上げる次第であります。又新潟の出身としては、東京に同博士あり、京大に鈴木虎雄博士あり、東西兩方面に漢學に名聲を發揮して居られます。森岡先生の句に「大塚は花盛りなり來ても見よ」といふのがあるやうに覺えてゐますが、その花の中に居て、殊に博士は輝しく美はしく、色も香もあることを思ひ、深くお祝ひ申上げる次第であります。

宮中の賢きあたりに於て御奉仕遊ばされ、非常な感激に滿たされつつ、而も非常の御修養の爲か、態度その他遺憾なかつたと漏れ承る、この點益々博士の御修養に敬服する次第であります。尙申上げることもございますが、他の皆樣からもお祝ひの言葉もありませう故、云はぬは云ふにいや勝る、これにて御免を蒙ります。尙將來の御健康を祈ります。

——拍手——

（乾盃——一同起立、學長發聲、「博士の爲、學園の爲、お國の爲」）

〔諸橋博士〕——拍手——

本日は私が今度宮中に奉仕したことに就いて、かくも盛大なる式をお擧げ下さいまして、深くお禮申し上げます。誠に私如き學も德もない身には、實に文字通り過分の光榮でありますが、斯かる寵榮を受くることについては、全く諸先生、諸先輩並びに志を同じうする同學諸君の誘掖善導のお蔭であると信じ、心からお禮申す次第でございます。又今回の寵榮の一原因はかくも歷史の美しい學園に職を奉じてをるためであらうと思ひまして、此亦厚く皆さまに御禮申し上げる次第でございます。

先頃は又、內野教授、森岡先生、中山教授から、誠に過分の御祝辭を賜はり、深い感銘に打たれました。自分のことに關する限り相當らぬのではありますが、將來斯の道に精進致したいと存じます。

昨年、突然宮內省から電話がございましたが、實はその前、陸軍省の方からと云つて電話がございまして、變な男が書物などを賣りに來たことなどもありました爲、今度もそんなことかと存じ、面會致しかねると御ことわりいたしまし

た。併し、先方では是非今日お會ひしたいと重ねての電話なので、正午過ぎにお會ひ申すことと致しました。然るに其の時になりまして、宮內省の方が禮裝にて來られ、かく〳〵の次第なりとのこと、今更天恩の有り難さに深く感じました。元より拜辭申すべき筋合のことではありませんから、其のまゝお受け致しました。

其れ以來、一年間、自分としては萬事戒愼致しました。特にこの大任を果すまでは、身體上の萬一のことがあつては公儀を欠くことにもなつて相濟まぬと思ひまして、あらゆる注意を拂ひました。其のためでありませうか、幸にも昨年は一家に一人の病人も出ず、こんなことは、私の家庭生活をいたしまして二十數年來、初めてのことでございます。國には老母もございますので、其も懸念致しましたが、私の爲に大變注意もされ、又お前が大任を果すまでは、どんなことがあつても健康に注意するから安心せよとのことでございました。果して其の方も別に故障はありませんでした。かうして昨年は暮れて今年になりましたが、さて、冬に恐れたのは風邪を引くことでございます。それこそ全く戰々兢々として、十二月半ばからは一切の夜の會は失禮いたしました。それに、私は咽喉を痛めるくせがございましたので、萬一咳でも出ては不敬に亘るからと思ひまして、御進講の日が決定いたしました十日前から、咳止の藥を求めまして毎日服用し、又當日になつてのどが涸れてはいけないと思ひまして、人にすゝめられて、嫌ひな生卵を十日前より毎日飲む練習をいたしました。

いよ〳〵當日になりましたが、さて今日こそ、天顏に咫尺し奉るのでありますが、あまりの恐懼のために、かへつて禮節を失することがあつてはと深く懸念いたしましたが、此も其の時刻になりましたら、案外落着きまして、殆ど平常の態度になれましたのは、天祐であると喜びました次第でございます。

先づ、私は自分としては、上述の如くあらゆる注意をはらつて、細心の準備をいたし、ありたけの力を傾けて御奉仕致しましたことでありますから、よしあしは別といたしまして、今日の自分としては、何等の遺憾もないのでございます。

さて、宮中に於ける御進講の樣子を話せよと、內野教授や齋藤教授の御注文でございますので、申し上げます。御進講は鳳凰の間で行はれました。其の御室は、大體、幅四間位、奥行は七八間位と御見受けしました。玉座が北の方に中央にございまして、其の向つて右方、少し下つた所に、皇后陛下の御席があり、玉座の卓子から二間足らず南方の所に進講者の卓子、椅子があり、進講者の机の後方の二間位下つて、御進講者及び控の者三人宛、すべて六人の席があり、又御進講申し上げる者の左側には、秩父宮、右側には同妃殿下の御席が在り、更に北の左側には、宮內大臣、內大臣の席がございました。又、玉座の後方には、侍從の方々、女官の方方の席がございます。鳳凰の間の御樣子は大體以上の如くでございますが、其の外側の廊下の如き所に、陪聽者の席があり、本年は學問關係として、女子高等師範の下村校長の顏なども見えましたやうでございます。昨年は首相、其の他の大臣なども其處に並ばれました。

そこで御進講がすみまして、別席に退出致しますと、そこに、宮內大臣、內大臣が主人役で晝食を頂きました。さうかうしてをります中に、彼此一時になりますと、更に宮內省にまゐりまして、茲で大臣から一人々々呼ばれまして、御下賜品を頂戴いたしました。それから皇后陛下よりの御下賜品も頂戴いたしました。それから再び御所に參內いたまして御禮を言上して退出いたしました。

次に、私の御進講申上げましたものは、御承知のやうな論語憲問篇の子路問君子の章でございますが、實は昨年大命を拜しました時、何を申上げるかゞ最も私の頭をなやました問題でございます。ここで先づ三つの標準を立てました。第一は陛下に申上げる以上は帝王學でありたいといふこと。第二は學校の講義でありますなら、其の內容を批判しなから講義することも一方法でありますが、今度の場合は自分の堅く信じて疑はない所でありたいこと。第三は、支那の書物には色々文獻として疑しいのが多うございますので、文獻として疑のないものでありたいこと。大體、以上の三つを頭に入れて、一晩考へました時に、頭に浮んでまゐりましたのが、今、申上げた論語の章でありました。論語の子路問君子の章の內容はすでに御承知のやうに、

子路問君子。子曰修己以敬。曰如斯而已乎。曰修己以安人。曰如斯而已乎。曰修己以安百姓。修己以安百姓。堯舜其猶病諸。

い言ふのでございまして、儒學の目的もよく示されてをり、又帝王學としてもよろしいと存じたのでございます。全く一生一度の機會に私として申上げる言葉は之を措いては他に無いと信じましたのでございます。

此のやうに致しまして、自分は責任を全くしたのでございますが、實は此の度、非常に感じましたことは、自分の德は勿論でありますが、直接、學問の淺いことを痛感いたしたのでございます。常は學生諸君の前では、格別淺學を恥づる所も無かつたのでありましたが、今度こそは眞に、それを痛感したのでございます。第二に感じましたことは、若し、父母が共に生きてをつてくれたといふことでございます。實は御進講の二十二日は恰も、父の命日ございまして、かた〴〵私には感慨が深かつたのでございます。又、後で伺ひますと、此の二十二日といふ日は、明治天皇に侍講として長くお仕へした元田永孚先生の御命日に當つてをるさうでございます。第三に感じましたことは、我が漢學界に關係のあることでございますが、彼の莊嚴な宮中の御儀式に漢籍の進講を古から御許しになる聖旨の有り難さでございまして、此亦身に沁みて感激いたしたのでございます。

以上が大體今回の私の大命についての感想でございますが、やつと任務を果してまゐりました、その時の感じは、唯有り難い、嬉しいといふ感じは、何も彼も忘れて、只らく〳〵いたしたと云ふ感じて一杯でございました。昔或る武將が、那須與一の扇の的の琵琶を聽いて泣いたといふことを、何時か讀んだことがございましたが、私が御進講に參內いたさうとする時の氣分では、慥かにその古の武將の心も解るやうに思へたのでございました。

大體、私の御進講の順序や心持は以上の樣なものでございますが、

最後に、本日の會に就いての皆樣の御誠意に對しては、厚く御禮申し上げます。

尙、私、下手な詩を作りましたのを、此處で朗讀いたしたいと存じます。暇があればどなたかに訂正願ひたいつもりで

をりましたが、今度の印刷にはそれも間にあひませんでしたので、そのまゝ朗讀致すことにいたします。

丁丑春日作　　諸橋轍次

長郊十里鮮彩霞　可憐春光入碧紗
時哉丹鳳銜尺素　色斯翔集微臣家
微臣奉命心倉皇　顚倒裳衣歷級惶
獻芹欲陳平生志　伏陛恭誦君子章
垂髫當年慈誨切　蹇々夙期匪躬節
退食委蛇想斯心　雙影含笑如有說
覇道由來聖所斥　玄虛不是經綸策
皇國蕭曹不乏人　靖獻誰任負荷責
嗚呼我徒之責在明道　學問思辨豈徒勞
過庭垂訓猶在耳　鞠躬勉爾事宵綯
風塵堪裏幾春秋　窮經未脫儒素嚮
光陰倏忽催人老　秋雨春風費綢繆
回首茫茫坤與乾　欃槍芒影動星躔
神州別有神靈護　佳氣鬱葱鳳闕邊
皇上　聖明訏厥謀　興能進賢無日休
旰食宵衣鴻圖開　王道蕩蕩天悠悠
雨露所霑及遐遐　雍穆洽熙仰光華

舜日堯天歳復歳　大夏大濩歴長加
勿謂城北春獨淺　此日小園梅正妍
更有惠風薫衣袂　馥郁梟娜御香傳

——拍手——

〔内野教授〕

これからは別に御指名致しませんから、御自由に御祝ひの詞をお願ひ致します。

〔近藤正治氏〕

私は先日も諸橋博士の詩を拝見いたまして、感慨にたへなかつたのでございます。そこで敢て一言申上げる次第であります。恐らく、此の席で博士の父上を御存知の方は、私の外にはあるまいと思ひます。私は博士の父上に數十年前お目にかゝつたのであります。博士の御宅は、五十嵐川のほとり、三條驛で下車して、溯ること數里の所で、槍峯（ヤリホウ）といふ山が數十仞の高さにそびえて、絶壁をなしてをる、天下の絶景の近くでありまして、其處は五十嵐川の上流になつてをるのでございます。その絶景を遠景とした所で、私は博士の父上におあひしたのであります。唯今、博士の朗吟され中に

垂髫當年慈誨切。　蹇々夙期匪躬節。
退食委蛇愬斯心。　雙影含笑如有說。

の四句がありましたが、正に私は。眼前に父上を髣髴として思ひ浮べざるを得ないのであります。

博士の父上は、鄕里に於ける詩人であり、詩文を好くされました。更に畫を好くされ、其の上俳諧をも好くされました。博士が今日の學識は、庭の訓の賜物であり、實に父上の血が脈々と傳つてをるの感が深いのであります。博士が十二三歳の頃、槍峯の絶壁に登つて、後にも前にも退きも進みも出來ずに、もう死ぬのではないかと思はれたなどゝ言ふ

お話も伺つたことがありますが、新潟の蒲原の山中から出て來られて、今日の博士あることは、全く庭の訓、父上の御教訓の然らしむる所であらうと思ひます。

博士の母上の方の御系統も、建部博士家でございまして、同じく其の血には學問の血が脈々として流れてをるのであります。全く今日の博士あるも偶然ではないのであります。

博士が如何に父上、母上を慕つてをられるかは、今更申上げるまでもないことで、博士の今日までの辛酸は、總べて御兩親の爲であつたのであります。

此の深山大澤から、此の龍蛇を出しましたので、それにつけても、唯今申しました四句が、心を打つのでございます。

友人の名を辱くする一人として、私は一言申上げずにはをられませんので、此だけで御祝ひの詞とさせていたゞきます。

——拍手——

〔日下部重太郎氏〕

今晩は先づ內祝ひと云ふやうな會でありますが、至極辭令を用ひず、素樸にお祝ひ申します。實は御進講のありました日に此の會の御案內がありました。元來漢文と國語とは兄弟でありますから、國語の人が誰か發起人になつてゐたらと思ひますが、これは私どもがうつかりしてゐた爲であります。今先まで保科先生が居られましたが、何か御都合が出來て、祝ひの言葉を申されずに中座なさつたので、私が些か祝辭を申し述べたいと思ひます。先程から色々と御話がありましたので、諸橋博士の人柄に就いては、こゝで申しません。博士の御家柄が博士の御進講に深い緣りがある事は今晩始めて承りまして、泌々日本と云ふ國柄について感慨を深うしました。一體日本の偉い所は一方良い家柄には必ず立派な人が出る事であると同時に、一方には水呑百姓の子供にも豐臣秀吉と云とやうな立派な人が生れると云ふ事です。扨貧乏なものが發憤するのは六ケしいと、昨日も中島信虎先生が云はれましたが、しかし良い家に生れた人が發憤して立

派になる事は、一層六ケしからうと私は思ひます。博士が博士のやうな家柄に生れて、斯くまでになられた事は最も尊敬する所です。今日熊坂先生かおつしやるには、こゝに鹽谷節山博士の詩があるから、それに和韻せよとの事であります。私はそんな柄ではありませんが、只心持だけを述べて、二十八字を綴つて見ました。御進講は雲の上の事でありますから、萬一にも、禮を缺く事があつてはと、諸橋先生に見て戴きました所、これで良いと言はれましたので、詩は志を言ふとの事でありますから、こゝで敢て申上げます。鹽節山博士の詩は次のやうな詩であります。

七絶　鹽谷節山

新年進講侍經筵
恭述魯論君子篇
優渥天恩寵光大
舉杯齊賀大儒賢

申すも畏多い極みでありますが、

聖天子の叡聖文武にまします事は申すまでもありません。明治天皇を照和の御代に拜する氣が致します。只惜しむらくは、輔弼の賢臣が少ない事であります。次に申上げる詩は、その意をも寫して詠んだものであります。

賀諸橋博士年進講之光榮幷及時事　次鹽谷博士之韻

拜命儒官侍御筵
虔々進講古經篇
聖明宵旰垂乾德
億兆齊思輔弼賢

——拍手——

〔玉井幸助氏〕

諸橋博士の德の高いお方であり、學殖の深いお方である事は、誰方も御存じであります。こゝに居られる誰方も御存じでない、私一人が存じてゐる博士の最もすぐれた點がありますので、披露致します、即ち博士は、古今を問はず、東西を論ぜず、世界中で比べものが無い美男子であると云ふ事であります。私は三十年の間、諸橋博士と親しく交際をして戴いてゐますが、博士はその人格學問に就いては、一度も自慢なさつた事はありませんが、會へば必ず自慢なさる事は、自分は美男子であると云ふ事であります。きつと自信があるのだと思ひます。遺憾乍ら、私には審美眼がありませんので、何處が良いのか了解に苦しみます。所が今回御進講の榮を擔はれた事は、天皇陛下の御前にまで、博士の人格學問が聞えたのでありますが、それは博士が最もおかくしになつた所であります。今度は蘊蓄を傾けて學問のありつけを悉されたのでありまして、その御喜びはさこそと思ひますが、平生最も自慢なされるお顔を、陛下のお前にお見せ申上げて如何ばかり御滿足であつたかと思ひます。皆さんもこの事を充分御察し下さい。

——拍手——

〔森本角藏氏〕

玉井先生は、自分だけ知つてゐると云つて話されたが、私も充分知つてゐます。玉井先生はどんな顔をしてゐられるか解らぬと言はれたが、私はどんな顔か知つてゐます。それは卵に目鼻をつけたと云ふ事です。

又近藤先生は、諸橋先生のお父樣を知つてゐるのは自分一人だと言はれましたが、私は隣に住んだ事がありまして、良く知つてゐます。そして感心する事は、諸橋先生が實に親孝行であらせられる事であります。

又、中山先生は、系圖の事を申されましたが、歴史の先生を以てしても、まだお解りにならぬ事を知つてゐます。即ち諸橋先生は直江山城守の系統をひいた家柄であります。どうか今後御調査下さる樣願ひます。——拍手——

〔金子彦二郎氏〕

私は同じ越後に生れ、新潟師範の後輩であり、高等師範の後輩であり、純粹の大塚畑である事も同じであります。諸先生はお父さんを存じでゐられるのでありますが、私は弟さんと妹さんとを良く知つてゐます。私は、先生お宅のお洗濯の水が流れるかも知れぬ五十嵐川のほとり、三條にて中學校の先生をしました關係上、その川の水を汲んで呑んだ私ですから、非常な深い關係があると思ひます。この關係上、心の底から御進講の光榮を御喜び申上げ、今後の御健康をお祈り申します。——拍手——

〔寺澤嚴男氏〕

私は博士の此の祝賀會席上に於いて、親しく博士のお話しを承つて居りまする間に、特に深く感激致しました事柄の一・二を、拙い言葉ながら申し上げることをお許し願ひたいのであります。

其の一つは、唯今此の近くのお席にゐらせられまする中山博士のお話しなどを承つて見ましても、諸橋博士の御家柄は、御郷里に於ける古くからの御名門であらせられ、且つ御父祖は、學者として、郷黨の教育薫化に御專念遊ばされ、大いなる御功績を遺された方々であるとの事で御座いまする。さて、昔ならば、藩主の御前に召し出されて、御講釋を申し上げると言ふやうな事でさへも、學者としての一家一門の譽れ、一身の面目、誠に此の上もない事であつたのでありまする。まして、御子孫の方が、九重の雲深きあたり、晴れの新年御講書始めに、かしこくも、天子樣の大御前に於いて御進講申し上げたと申すやうな事に對して、草葉の蔭にゐます昔の方々が、どんなにお喜びになり、どんなにお感じになつた事でありませうか、御推察申し上ぐるに余りある事でありまする。かう言ふ事を考へて居りますると、私迄も思はず目がしらが熱くなるのを覺ゆる次第で御座いまするが、御孝心の深い博士は、殊に此の點に關する御感動が深いやうに、博士の唯今のお言葉の端々にも窺はれた事でありまする。

されば、まことの腰折れながら、つい私は次のやうな一首を口ずさみました。

大君のみ前にはゆる君がけふを

草葉のみおやいかにおぼさむ

次に博士のお話しの中に、此の一世一代の大事の當日に、萬一風邪などの病氣をするやうな事があつても、又家族の御遠慮申し上げなければならぬ病人を出すやうな事があつても、それこそ大變であるからとの戒心から此の點に向つて非常なる注意を拂つた所、近年、家族の數が增してからは、一年中病人が無くてすむと云ふやうな事は決してなかつたのに、此の一年間は自分も又家族も、少しも病氣をすると言ふやうな事もなく、極めて健全に過す事が出來たと仰せられました。精神の緊張が、からだの健康の上に大いなる影響を及ぼすと云ふ事は、今更申す迄もない事でありまして、一家の非常時などに際して、此の場合、どう云ふ事があつても病氣などになつてなるものかと云ふ一同の眞劍な強い心の張りと、水も洩らさぬ周到の警戒とに依つて、其の一家の中に病人を出す事がなくてすむと言ふ事は、よくあある習でありまするが、博士の場合に於けるが如き顯著なる實例を、茲に私共が知る事が出來ましたのは、實に深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如しと云ふ類ひの、愼敬に關する數々の聖賢のみ訓へさながらの博士の御性格の强い現はれに依るものであると信ずる次第でありまする。

（右の一篇は、一月二十九日の、若溪會に於ける諸橋博士祝賀會席上に於いて述べる積りで立ちかけたのを、時間の都合で御遠慮申してよす事に致しましたから、其の時に申し上ぐべき言葉そのまゝに書き記したのでありまする。）

內野台嶺氏閉會之辭

話しは盡きさうもありませんが、時間も經過しましたので、この會はこれで閉ぢたいと思ひます。この後はどうか談話室にて御自由に御ゆつくり御寬ぎ下さい。又賀帖に御署名無き方は是非御記名を願ひます。尙寫眞御希望の方は實費、一枚三十錢で御頒ち致します。——拍手——